



学生がインタビュー

ウスビ・サコさんに聞く 「美術を志す」ということ

ウスビ・サコさんは、マリ共和国出身の建築学者で、アフリカ出身者として日本で初めて大学の学長を就任されました。多文化共生や異文化理解の重要性を発信し続け、日本社会に新たな視点をもたらしています。そんなウスビ・サコさんは、美術・芸術をどんな風に捉えているのか、これから美術を志す中学生に伝えたいことは何か。美工生がインタビューしました。

ウスビ・サコ

京都精華大学 元学長 / 同大 名誉教授 / 東京都立大学法人 理事 / 東京都立大学 特任教授

Interview
to Professionals

美学的な発想こそが、社会を豊かにしていくために必要なですね。

Q.美術が社会に与える役割や影響とは？

A.美術とは、発信する側は自分の内面を表現し、受け取る側はそれを共感したり、響き合ったりしながら受け止める。そういう関係の中で成り立つものなんです。技術とは違って、美術は何もないところから作り出すもの。だからこそ、発想そのものが特別で、美術の持つ価値はそこにあるんですね。

今の社会って、どんどん合理化されて、企画や構造のもとで作られるものが多い。でも、美術はそういう枠には収まらず、人間の本心や、自然に対する受け止め方を表現するものなんです。

だから、美学的な発想こそが、社会を豊かに

いくために必要なですね。論理的に解決できない問題も多い中で、クリエイティビティが求められる場面はたくさんある。そういう課題があるからこそ、美学的な視点を持った人が、新しい価値を生み出していくのだと思います。

また今までの歴史を見ても、社会の現象を表現によって解決しようとした作品がたくさんあるし、普段の生活では気づかない美しさを描き出すこともある。だから、社会の発展には美術が影響を与えてきたし、逆に美術の発展にも社会の動きが関わっている。美術と社会は常に影響し合っているものだと思います。

これからの社会では、新しい価値を生み出す発想が求められている。

と思うんです。

美術を学んでいる人って、「この枠にはまらなきゃいけない」という感覚が薄いんですね。だからこそ、新しい価値を生み出すことができるし、これからの社会ではそういう発想がすぐ求められると思うんです。

実際、最近の企業も、「今までにない視点を持った人」を求めていますよね。決められたことをただこなすだけの人ではなく、課題を見つけて、新しい解決策を考えられる人。そういう力を持っているのが、美術を学んでいる皆さんたちなんです。

好きを掘り下げると、世界は無限に広がる。

Q.将来何になるかが決まっていなくても、美術が好きというだけで、美術の道に進もうとすることについてどう思いますか？

A.「絵が好き」という気持ち、それだけで十分な理由になると思います。大事なのは、その「好き」を掘り下げること。例えば、どんな絵が好きなのか、何に惹かれるのか。そうやって考えていくと、見えてくる世界は無限に広がるんです。逆に、「何になりたいか」を最初から決めてしまうと、可能性を狭めてしまうこともある。

人生は何事もすべて「経由地」ですよね。何かを目指して、それになったら終わりではなくて、その

経由を経由して次の道がある。美術を学んだからといって、必ずしも美術の仕事に就くとは限らない。大学で別の分野に進むかもしれないし、仕事をする中で美術が生きてくる場面が出てくるかもしれない。でも、どんな道を選んでも、その時々で掘り下げたことは次につながるんです。

仕事はゴールじゃなくて手段。大事なのは、自分の喜びをどう追求していくか。「好き」という気持ちは大きな原動力になるし、それがあからこそ続けられる。今すぐ答えが出なくても、美術を続けながら、自分の経由地を増やしていけば、きっと何かが見えてくると思いますよ。



Q.美術・芸術を志す中学生や保護者の方へメッセージをお願いします。

A.美術は、生き方の一つだと思います。美術を学ぶことは、単に技術を身につけるだけじゃなくて、感覚を磨くことでもある。今の社会は、何でも構造的・機能的・合理的に作ろうとする傾向がありますよね。でも、そういう考え方だけでは、どこかで行き詰まってしまう。そんなときに役立つのが、美術的思考なんです。

美術的思考というのは、社会の新しい在り方を教えてくれるものだと思うんですね。美術と関わることで、新しい生き方を見つけることができるんです。

だから、美術を学ぶことを「将来のためになるのか」とか「仕事に直結するのか」だけで考えるんじゃなくて、美術が持つ価値に気づいてもらえたらなと思います。ぜひ、いろんな人に美術の大切さを知ってもらいたいです。

美術と関わることで、新しい生き方を見つけることができるんです。

◆インタビューを終えて

ウスビ・サコさんとお話を通じて、美術を学ぶことが社会において柔軟な発想や適応力を育む重要な役割を持つことを再認識しました。また、美術を学ぶ上で悩む、個性や自分らしさについても、制作過程で生まれる工夫や思いこそが、唯一無二の価値を生むという考えに励まされました。美術は「自分を語ること」「見つめること」が大切。他人との違いを恐れず、それを楽しむ姿勢を持ちたいです。

今後は美術を通してさらに自己理解を深め、より広い視野を持って学びを続けていきたいです。

3年生 川島 夏凜さん 野々内 薫さん 佐々木 杜子さん 寺田 希子さん



Q.私たちのような、高校生から美術を学ぶ意味や大切さを教えていただけますか。

A.今の社会はどんどん合理的になって、型にはまった人材を育てようとしているんですね。大学でも、「こういう能力を持った人を育てます」というカリキュラムが決まっていて、それに合わせて教育が行われている。でもそれって、言ってしまうと「工場で作る製品」と変わらないと思うんです。

本来、教育ってそんな単純なものじゃないですね。教育とは畑のようなもの。一人ひとりが違う考え方を持っていて、それを伸ばしていくのが教育の本質。美術を学ぶことの価値は、まさにそこにある